

新しい年を迎え、気持ちも新たにスタッフ一同頑張ってまいります。本年も引き続きメールマガジンのご愛読をはじめ、当財団へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

現在会員登録数 3,960 人さま。次号は 2 月 21 日発行の予定です！

◆◆◆ 目次 ◆◆◆

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

【1】お知らせ

● IICLO オンライン講座 I 「授業に役立つ！子どもの文学5つのレッスン」

◆ 第1回 宮沢賢治を読み直す①「注文の多い料理店」（講師：宮川健郎）

申し込み → <https://iicloonline1-1e.peatix.com>

◆ 第2回 宮沢賢治を読み直す②「雪渡り」（講師：遠藤純）

申し込み → <https://iicloonline1-2.peatix.com>

◆ 第3回 あまんきみこを読み直す①「白いぼうし」と「名前を見てちょうだい」（講師：宮川健郎）

申し込み → <https://iicloonline1-3e.peatix.com>

◆ 第4回 あまんきみこを読み直す②「ちいちゃんのかげおくり」（講師：土居安子）

申し込み → <https://iicloonline1-4e.peatix.com>

◆ 第5回（特別編） 「あまんきみこさんに聞く読むことの喜び」

申し込み → <https://iicloonline1-5.peatix.com>

※ 3月31日まで配信、視聴料は各回 1,300 円、各回ごとにお申し込みください。気になる回だけの視聴も可能。期間中何度でもご覧いただけます。

詳細は ↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#iicloonline1

● 講演と対談「日本児童文学が宮沢賢治から受け取ったもの」

宮沢賢治学会イーハトーブセンター、日本児童文学学会関西例会との共催で、3月21日（火・祝）に大阪府立中央図書館ライティホールで開催します。

※ 申し込みは2月1日から受け付けます。詳細は ↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#050321

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

*年間1万円以上ご寄付いただいた方には、イイクロちゃんグッズをプレゼントしています。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable → <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclo1196>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/m1_youtube/index.html

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム
■ ----- ■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Yukiko's Talk

『グッゲンハイムの謎』 ロビン・スティーヴンス/著 シヴォーン・ダウド/原案 越前敏弥/訳 船津真琴/装画 東京創元社 2022年12月 対象年齢：小学校高学年から

* 今回のゲストは武庫川女子大学准教授の福本由紀子さん（Yukiko）です。

あらすじ：記憶力がずばぬけていて、人づき合いがあまりうまくないテッドは、母と姉のカットとともに、母の妹であるグロリアおばさんと、その息子のサリムがいるニューヨークにやってくる。そして、おばさんが主任学芸員をつとめるグッゲンハイム美術館でカンディンスキーの絵が盗まれ、おばさんが逮捕されるという事態になる。おばさんが犯人ではないと信じるテッド、カット、サリムは、犯人と絵のゆくえを捜す。

Yukiko：シヴォーン・ダウドが『ロンドン・アイの謎』（越前敏弥/訳 東京創元社 2022年7月）を書いた後亡くなったため、ロビン・スティーヴンスが続編である本書を執筆しましたが、同じ作者が書いたように感じながら読みました。

Yasuko：本当に。謎解きも、登場人物の個性も、ユーモアのセンスもしっかり引き継がれていると思いました。今回、この対談のために読み返しましたが、犯人を知って読むといろいろなところに犯人のヒントが隠されていることがわかり、おもしろかったです。

Yukiko：テッドたちは犯人の可能性のある盗難事件が起こったときに美術館で働いていた人をリストアップしていきます。そのために、テッドたちの思考の過程がよくわかり、読者も推理に参加しやすくなっていると思いました。

そして、この作品の魅力は、テッドたちが犯人捜しをする過程で、グロリアおばさんの職場の人間関係を知り、それぞれの人の生きざまに触れるという点です。テッドたちは、人は見かけだけではわからないということを感じます。

Yasuko: 加えて、何よりテッドが個性的。前作同様、テッドの記憶力と、論理的思考が事件を解決に導きます。テッドが比喻や人のつく嘘にとまどったり、カットとサリムが見逃してしまうことをしっかり覚えていたりするところは、ユーモラスであると同時に、多様なものの見方がいかに大切かということが伝わります。また、当たり前のように感じているコミュニケーションが実はいかに複雑な要素を持っているかも認識できたと思いました。

Yukiko: 作品の最後の一文は「ぼくはテッド・スパーク。ぼくは、ぼくでいられてうれしい。」とあり、テッドが肯定的に自分をとらえていることが私もうれしく感じました。

作者の「謝辞」に『クローディアの秘密』(E・L・カニグズバーグ/著 松永ふみ子/訳 岩波書店)が愛読書として挙げられていたように、美術館が舞台という点も魅力的でした。グッゲンハイム美術館は、一度にさまざまな角度から芸術作品が見られる構造を持っており、この作品のテーマにぴったりです。

Yasuko: この作品をきっかけに、美術館や美術作品、美術館で働くいろいろな人たちのことを知ることができるのも魅力ですね。いつかグッゲンハイム美術館に行ってみたくくなりました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第89回「化物丁場」

〈すきとおった手〉の不気味さ

西の仙人鉱山に用事があった〈私〉は、黒沢尻で本線(東北本線)から軽便鉄道に乗りかえます。

空いていたとはいえ、二十人ぐらいが乗り合わせていた車中では、〈昨日までの雨と洪水の噂〉で持ちきりでした。ここ五～六日雨が降り続いたために、〈狐禅寺では、北上川が一丈六尺〉(約4.8メートル)増水して洪水となり、また〈宮城の品井沼の岸では、稲がもう四日も泥水を被〉るなどの被害が出たのです。

そんななか、ある鉄道工夫が〈雫石、橋場間、まるで滅茶苦茶だ。レールが四間も突き出されている。枕木も何もでこぼこだ〉と太く強い声で言います。〈私〉は工夫の話に興味を覚え、〈「ああ、あの化物丁場ですか、壊れたのは。」〉と応じます。化物丁場とは、工夫が働いていた雫石―橋場の線路敷設工区のこと、ここは何度工事しても繰り返し崩落することからそのように呼ばれていたのです。

工夫は、自ら経験した三度にわたる崩壊とその修復工事について語り、〈私〉は〈つめたい十一月の空気の底で〉〈まっ白な広い河原を小さなトロがせわしく往ったり来たりし、みんなが鶴嘴を振り上げたり、シャベルをうごかしたりする景色〉を、また技師や工夫が〈赤い毛布でこさえたシャツを着たり、水で凍えないために、茶色の粗羅紗で厚く足を包んだりしている様子を眼の前に思い浮かべま〉す。藤根で工夫は下車し、〈私〉は処書のある名刺を出して別れるところで物語は閉じられます。

幾たび工事しても崩落する原因として、鉄道院の技師は〈よくあちこちにあ

る、山の岩の層が釣合がとれないために起る」と言いますが、これについて現場をよく知り、実作業を担う工夫は「誰もあんまりほんとはしませんや」と否定的です。「神官でも呼んで、よくお祭をしてから」工事をすべきと工夫はいい、「私」も「盛られた砂利をみんなが来てはまだいたずらに押しているすきとおった手のようなものを考えて、何だか気味が悪く」なります。

題名にもある「化物」とは、地層や地質、土壌などの知識だけでは解決できない人知を超えた自然の荒ぶる姿のようです。「私」が語る力点はそこにあり、厳しい自然と対峙し、翻弄されつつも懸命に働く労働者たちへのまなざしや、科学の力では決して統制できない自然の怖ろしさ、不気味さといえます。見えない「すきとおった手」に焦点をあてる「私」の語りは、賢治自身の関心のありようを表現しているともいえます。(ペ吉)

(本文の引用は、角川文庫『風の又三郎』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 43

お月さん ももいろ
どこさ こけた
海さ こけた
さんごに なって
ねんねんよ
ねんねんよ

(『お月さんももいろ』 松谷みよ子/文 井口文秀/絵 ポプラ社 1973年
3月 p.16)

3日前の1月17日は、28年前に阪神淡路大震災が起こった日です。兵庫県西宮市に住んでいた私は、震災後、IICLOの有志といっしょに、避難所になっていた西宮市立中央体育館でおはなし会をさせてもらっていました。

おはなし会に行き始めた頃は、『キャベツくん』(長新太/作 文研出版 1980年9月)をはじめ、ユーモラスなもの、心が和むと思われる絵本を選ぶようにしていましたが、回を重ねていくと、違う種類の本も読んでみたくなりました。そこで、ある日、『お月さんももいろ』を読みました。私自身は子どもの頃に出会っていて、どことなく、自分の悲しい気分を満たしてくれるような記憶があったからでした。

じいやんと二人暮らしの少女おりのが海に打ち寄せられたももいろさんごを見つけました。おりのは、じいやんが病気になったとき、薬をくれた獵師与吉にお礼としてさんごを渡します。おりのと与吉は惹かれ合いますが、与吉は山の者と海の者は結ばれないことを悟り、姿を消します。おりのは与吉を思って引用の歌を歌います。ところが、殿様は、この歌のために、この地にさんごがとれることが世の中に知れることを恐れます。取り調べの途中でじいやんは死に、さんごを差し出すように言われたおりのは海へさんごを探しに行つて命を落とします。そして、さんごを持っているところを見つかった与吉も殺されてしまいます。「お月さんももいろ」から始まる歌は違う歌になって

伝えられます。

著者松谷のあとがき（「この絵本によせて」）によると、土佐には「お月さんもいろ」から始まるわらべ唄が存在し、それがこの絵本の元になっているとのこと。作品からは、死に対する哀しみ、権力や差別に対する静かな憤りが伝わってきます。長い話でありながら、子どもたち（幼児～小学校高学年まで）の集中が途切れることなく、読み終わったあと、沈黙の時間が流れました。子どもたちから多くのことを教わった経験でした。（Ｙ）

《 4 》 行って来ました！

MARUZEN&ジュンク堂書店で2月3日まで開催されている「『ナマコのばあちゃん』絵本原画展」に行ってきました。会場に着くと、ナマコで描かれた文字の「ナマコのばあちゃん」のタイトルが目にとびこんできます。たくさんのおうちんが天井からぶら下げられ、絵本に出てくる海の生き物などのキャラクターがあちこちに貼られ、一人一回引くことができる「なまこのおみくじ」などがあり、お祭りのようで楽しい雰囲気です。

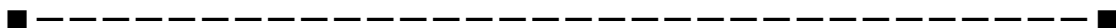
会場には、こしだミカさんの絵本『ナマコのばあちゃん』（偕成社 2022年9月）の原画が絵本の文章を添えて展示されていて、お話を楽しみながら見ていきました。ナマコのばあちゃんが、「うみのそこがブルンッとみぶるいして、うみのみずがもんどりうってでんぐりがえった」ことで、陸から海に流されてきたいろいろなものを食べては出してを繰り返して、海がきれいになっていくお話で、巨大になったナマコのばあちゃんは人間にばらばらに解体されて捨てられます。

とびらの次のページには、青い海に赤色のナマコのばあちゃんがどっしりと描かれていて色鮮やかです。その次のページに描かれた魚やタコなどもカラフルで、いろいろな生き物のいる海の楽しさが伝わります。ナマコの足や魚のうろこ、海藻などがひっかいたような細かい線で描かれていて立体感がでて、泳いでいる動きを感じました。特に印象に残ったのは、海がめちゃくちゃになった場面の暗い絵でした。激しい波の様子が迫力いっぱい描かれ、水の音が聞こえてくるように感じました。そのあと、ナマコのばあちゃんが汚れた水を勢いよく吸い込んで、きれいな水をぱーっと吹き出している絵は、ナマコのばあちゃんの必死さが伝わってきました。

机の上には、『ナマコのばあちゃん』といっしょに、『ナマコ天国』（本川達雄/作 こしだミカ/絵 偕成社 2019年6月）も並べられています。この絵本にはナマコの生態が詳しく書かれていて、まっぷたつにされても2匹になるとわかりました。ナマコのばあちゃんは人間に解体されても生きていかなど、生きていたらいいなと思いました。そして、私が引いたおみくじは「食べて出して食べて出してみんな生きてるんだなあ。」と書かれていて、ナマコといっしょであることがとてもうれしくなりました。（Ｋ）

MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店

https://honto.jp/store/detail_1570065_14HB320.html



【3】全国のイベント紹介

● JBBY 子どもの本の翻訳フォーラム「昔話を訳す楽しみ」

日時：1月29日(日) 14:00~16:30 オンライン (Zoom)

パネリスト：愛甲恵子 (ペルシャ語翻訳家)、かみやにじ (韓国語翻訳家)、
木村有子 (チェコ語翻訳家)、さくまゆみこ (英語翻訳家)、柴なほ (ハンガリー文学研究者)、長野徹 (イタリア語翻訳家)

コーディネーター：堀内まゆみ (元岩波書店編集者)

参加費：有料 申し込み：必要

主催：日本国際児童図書評議会 (JBBY)

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『グッゲンハイムの謎』をプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ NO.149 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ

office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は2月10日(金)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

今年の干支はうさぎ。小学校で飼育していた頃のことを懐かしく思い出します。小さくてかよわいと思っていたら、脚力は半端なく強い。IICLOもうさぎのように飛躍の年にしたいと思います。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメルマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL: 06-6744-0581 FAX: 06-6744-0582 E-mail: office@iiclo.or.jp